

一

次の問いにそれぞれ答えなさい。

問1 次の四角で囲まれた漢字は慣用表現の一部です。それぞれに共通して続く動詞を考えてひらがなで答えなさい。

(例題) 馬 気 息 ↓(答え) あう

⑤	④	③	②	①
音	板	釘	恩	手
棚	鼻	水	油	目
名	盾	魔	顔	身

問2 次の各文にはコンピュータを使って文字を入力したために起きた、変換のあやまりがあります。その部分をそれぞれ一か所ずつ探し、漢字を使って正しく書き直しなさい。

- ① 敦くんにメールを送ったが彼はまだ変身してくれない。
- ② 夏は日差しが強いので、マンホールが暑くなる。
- ③ 明日のコンサートの会場は何時の予定ですか？
- ④ しつかりトマトを見て打てば、命中率も上がるだろう。
- ⑤ 始めたばかりなので、私はまだこの仕事に離れていません。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出しの場合は、句読点や記号も一字に数えます。)

やさしさということばの意味は、たくさんあります。『広辞苑(第五版)』の「やさしい」をみると、

- ① 身も痩せるように感じる。はずかしい。
- ② 周囲や相手に気をつかってひかえ目である。つつましい。
- ③ さし向かうとはずかしくなるほど優美である。
- ④ おだやかである。すなおである。おとなしい。温順である。
- ⑤ 悪い影響を及ぼさない。
- ⑥ 情け深い。情がこまやかである。
- ⑦ けなげである。殊勝である。神妙である。
- ⑧ 「易しい」と書く)ア 簡単である。容易である。イ わかりやすい。

とあります。すつかり定着した「地球、環境にやさしい」や「肌によさしい」などは、「⑤悪い影響を及ぼさない」に相当します。本書がテーマにしているやさしさは、この⑤に「②周囲や相手に気をつかってひかえ目である」を加えた意味に近いと思います。

『日本人は「やさしい」のか』(竹内整一著、ちくま新書)によると、やさしさ(やさし)ということばの意味は、古代から現代までのあいだに、かなり変化してきました。やさしいということばには、羞恥・美的理念・倫理・情け深さといった意味が次々につけ加わっていき、現在は、ひとを傷つけることに関連した意味あいが使われることが圧倒的に多いと、この本は指摘しています。

とすると、さきほどの「I」とは、現代では「II」を指すと言えそうです。やさしいとは「悪い影響を及ぼさない」ことですから、現代のやさしさとは、ひとを傷つけないように気をつかう態度やふるまい、という意味になります。

ただし、ひとを傷つけないという方法はひとつにかぎられません。現代的なやさしさにも、いろいろあるということです。それを、やさしいきびしさ、と、きびしいやさしさ、を例にあげて説明します。

「やさしいきびしさ」はやや古いタイプのやさしさです。基本的には相手にきびしく接します。ただし、そのきびしさはやさしさにもとづきます。

たとえば、将来、相手が苦勞したり傷ついたりしないように、いまは相手にきびしく接して、反省させたり、ある態度やギジュツを身につけさせるような場合です。

きびしく接するので、相手を傷つけることもあります。しかし、それは、将来の相手のことを思っておこなう行為です。いまきびしくしないと、将来、相手が一人前にならなかつたり、はじをかくかもしれない。だから、傷つけるかもしれないけれども、相手のことをほんとうに大切に思うなら、ここはきびしく接することにしよう。傷は、いつかは治るのだから」という態度です。

いまではほとんど使われませんが、かつて「愛のムチ」ということばがありました。これはやさしいきびしさのテンケイ例です。職人の世界やスポーツの世界などには、あたりまえのように存在したやさしさのあり方だと思えます。

ただし、「愛」の名を借りた、不条理な処罰やうさばらしがおこなわれていたことは、容易に想像できます。ですから、「愛のムチ」をサンビするつもりはありません。

Ⅲ やさしいきびしさを実践しない親や指導者は、「甘やかし」と言われて、周囲から非難されたのも事実です。Ⅳ、やさしいきびしさは、ひとを一人前にするのにフカケツな接し方だったと考えられます。

一方、きびしいやさしさは、あたらしい、現代的なやさしさです。それは、いま傷つけないように全力を尽くすこと、を要求します。さきほどのやさしいきびしさは、いまは傷つけるかもしれないが将来を思えば仕方ないと考えるのとは、対照的です。

傷つけないようにする点では、やさしいと言えます。しかし、絶対にやさしくしないと許さないぞ！もし傷つけたら、それなりの仕返しをするからな！というような、きびしさを感じられるのです。

具体例として、「謝るぐらいなら、最初からあんなことするな！」という発言をあげます。

いまから一〇年ほどまえ、神戸の自宅近くの歩道を歩いていると、女子高校生たちが熱心に何かを話しながら、わたしの横を通りすぎていきました。そのとき、ふと聞こえたのが「謝るぐらいやったら、最初からあんなことせんかったらええのに！」ということばでした。

だれか(A)がこの発言の主(B)に不快なことをしてしまい、それをAは謝罪したのですが、Bには謝罪だけでは気がすまなかった、ということなのでしょう。

これを聞いて、わたしは変な感じがしました。そういうフレーズを使った覚えがなかったからです。わたしの世代がよく使うのは、

② 「ごめんですむなら、警察いらん」です。

そして、次のようにも感じました。謝罪することになると最初からわかっていたら、AもわざわざBが不快に感じるなどしなかつただろう。どのようなことをしたら相手に不快感をあたえ、傷つけることになるか、すべてをあらかじめ知ることなどできない。だから謝罪することに意味があるのにも。もし謝罪が受け入れられないなら、何もできなくなるではないか。きびしい性格の女の子だなあ」と感じたのです。

この発言は、きびしい性格を持つ、この高校生だからこそその発言だろうと、そのときは考えていました。

ところが数年後、三重県伊勢市で働くようになって、ふたたび、女子高校生が「謝るぐらいなら、最初からあんなことするな！」と話しているのを耳にしたのです。さらにしばらくして、今度は同僚の先生が、おなじ発言をしていました。

こうなってくると、神戸でわたしが聞いた発言は、たんに彼女のきびしい性格ゆえの発言だとは考えにくく、ひとつの社会的ルールをあらわしていると推測されます。もちろん、わたしのまわりに、たまたまきびしい性格のひとがいただけ、という可能性もあります。しかし、このような発言にあらわれている考え方は、若者を中心にすでに定着している、とわたしは感じています。

この、「謝るぐらいなら、最初からするな」という発言にあらわれた考え方こそが、きびしいやさしさです。傷つけないようにする点で、この考え方はやさしいと言えます。しかし、そこには、相手を不快にしたり、傷つけないようにする点、もしわたしが傷つけたら、許さないぞというきびしさがかげええます。だから、きびしいやさしさ、なのです。

(森真一『ほんとはこわい「やさしさ社会」より)

※作問の都合上、文章の一部を改変しています。

* 美的理念……美の対象となる美しさを、感情的ではなく理性的・倫理的にとらえた考え方。

* 倫理……社会生活において、人として守るべき道。道徳。

* 不条理……物事の筋道を通らないこと。

* 同僚……同じ職場で働いている人。

問1 傍線部ア～エのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 本文中の空らん I、 II にあてはまる言葉を、本文中から I は四字で、 II は九字でそれぞれ探し、抜き出して答えなさい。

問3 本文中の空らん III、 IV にあてはまる接続詞として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。
(同じ記号は二度用いてはならない。)

- ア なぜなら
- イ さらに
- ウ ところで
- エ けれども
- オ だから

問4 傍線部①「謝るぐらいなら、最初からあんなことするな!」・傍線部②「ごめんですむなら、警察いらん」という二つの発言にはどのようなことが示されていると筆者は考えていますか。本文中から二十字で抜き出して答えなさい。

問5 傍線部③「きびしい性格の女の子だなあ」とありますが、なぜ筆者は「きびしい」と感じるのですか。その理由を「にもかかわらず」という接続の言葉を使って説明しなさい。

問6 傍線部④「相手に不快にしたり、傷つけたりしないよう、いま全力をあげて努力しろ!」という考えにあてはまるものには○を、あてはまらないものには×を解答らんに入力しなさい。

- ア 泣かせてしまった弟のきげんを直そうと言葉をかける。
- イ 漢字が書けるようになるまで何回も練習する。
- ウ 友達からのメールにはできるだけ早く返事をする。
- エ 相手の主張がまちがっていてもむやみに指摘しない。

問7 次の文は、本文で述べられた「やさしいきびしさ」・「きびしいやさしさ」について説明しています。それぞれの空らんに入る部分本文の中から抜き出して補い、文を完成させなさい。

「やさしいきびしさ」は、将来 A きびしく接して人を一人前にしようとするもので、その B は C にもとづいているといえる。

一方、「きびしいやさしさ」は、 D を要求し、 E 点でやさしいといえるが、やさしくしないと許さないというきびしさを感じられるものである。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出しの場合は、句読点や記号も一字に数えます。)

【 コージとナオトとユウは気の合う友達どうしです。ある日、テストを白紙で提出するという事件をおこしたユウは家出をしてしまいました。コージはユウを心配しながらコージの父親である吾郎と連絡がくるのを待っていました。本文はその続きの場面です。】

「あつ、ユウくん！」

のき下に、ユウが座り込んでいた。ランドセルを背負い、塾の手提げ袋をもったユウが、まるで I 姿で座り込んでいた。今にも泣き出しそうな顔だった。そして、遅れて顔を出した吾郎の顔を見て、照れくさそうに小さなお辞儀をした。

「寒かったろ、一杯やるか？」吾郎は、冗談交じりにそういうと、台所へ向かった。

コージとユウは、向かい合うように座った。

「さつきナオくんから、電話があつたよ」

「そっか。じゃあ、ばれてるんだ」

「うん、びっくりしたよ」

「すまん……」

やがて、台所から吾郎が、お盆をもつて現れた。

「牛乳しかないけどな、あたたまるぞ」

「すみません」ユウは、ペコリと頭を下げると、一気に牛乳を飲み干した。

「ふうっ、うまい」ユウの顔に、笑みがこぼれた。

鼻の下を真っ白にしたユウを見て、吾郎もにっこりと笑った。

「ユウ、腹減つてたのか？」

「晩飯食ってなかったから……」

「よし、待ってる」吾郎は、張り切って台所に向かった。

鍋の音や水道の音が聞こえてきた。床をきしませる足音もした。それを聞きながら、二人は黙ったままだつた。

コージは、この追いつめられた友だちにかける言葉などもち合わせていなかった。そして、ユウは、言葉など交わしたら、泣き出してしまふようになる自分を感じていた。ときおり、台所から聞こえてくる、調子つばずれな鼻歌を聞きながら、二人は黙ったままだつた。

「おまたせ！」吾郎は、台所からごきげんな顔でやって来ると、ラーメンの入ったどんぶりをユウの前に置いた。

「さっ、早く食え」

ユウは、割り箸をパキンと割ると、どんぶりに顔を近づけた。ふわつとあたたかい湯気が顔を包んだ。

「いただ・き……」ユウは、歯を食いしばった。あたたかい湯気で、張りつめていたユウの心が、崩れ落ちた。

「うくっ、くくっ……」

涙を堪えるユウを見て、うろたえながら、吾郎がいった。

「おっ、なんだ、コージ。マラソンでもしないか」

「えっ、う、うん」

ユウに止める暇も与えず、二人は玄関を飛び出した。

(こんな夜に、マラソンだなんて……)と、ユウは思った。

(なんて、間抜けなんだ……なんて……やさしいんだ……なんて……)

もう、涙は止まらなかった。止めようとも思わなかった。

部屋に残されたユウは、わんわんと声を上げて泣いた。どんぶりの中に涙がこぼれ落ちる。ユウは、そのラーメンをかまわずにすすった。泣きながら、くしゃくしゃの顔ですすった。もう、味などわからない。涙の味しかなかった。

しかし、ユウの心には、ラーメンの特別なあたたかさだけが残った。

(中略)

「なあ、コージ。俺が、0点取ったこと、おじさんにいつてないのか」

「うん、いつてない」

「そうか……」

「なにーっ。ユウが0点を取った？ ユウでも、0点取るんだ」二人の話を聞いた吾郎が、うれしそうにそういった。

「父ちゃん、ちがうよ。ユウくんは、わざと0点を取ったんだよ」

「わざとか……まあ、いいんじゃないか。そんな気分るときもあるさ」

吾郎の言葉を聞き、ユウは、少し II 表情を見せた。

「でも、父ちゃん。俺が0点取ってもだれも騒がないのにな。ユウくんは、大変だよね」

「だけど、お前が100点取ったら、みんな騒ぐぞ。カンニングでもしたのかって」

「ひどいよー」

二人のやり取りを見ながら、ユウは少し考えていた。そして、勇気を出して話し出した。

「おじさん、初めてだよ……わざと0点取ってもいいなんて、いつてくれた人、初めてだよ」

「俺は、無責任だから」

「先生も、親父も、みんな、不真面目とか卑怯だとかいってさ、理由ばかり聞きたがる。なんでそんなことをしたんだってね。理由はあ。でも、そんな奴らには絶対に教えない」

「ユウも、なかなか頑固だな」

「おじさん、俺が0点取ったのは、半分おじさんのせいなんだぜ」

「ええっ、俺の？」

ユウの言葉に、吾郎はおどろいた。そして、コージも目を真ん丸にした。

「だって、あの日。キャンプの夜にさ、おじさん、いっただろ。〈共犯者〉になれて。だから、俺、0点を取ったんだ。先生も、親父も成績がいいとか悪いとかで決めつける。親父なんか、コージやナオトと付き合うなとまでいうんだ。だから、俺は、みんなの仲間だったところを見せつけたかったんだ」

「それで、0点を取ったのか」

「うん」

吾郎は、困ったなあという顔で、ポリポリと頭をかいた。

④「おじさん？　なんか変だった？　なんかちがった？」

「ん……ちがうな。だいぶちがう」

その声を聞いて、ユウの顔色がにわかに曇った。

「なあ、ユウ。お前はコージやナオトと友だちなんだから」

「うん……」

「だったら、そのままでもよかったんじゃないか？」

「だって……」

「俺はな、100点が取れるユウと20点しか取れないコージが友だちだから、すごいと思うんだ」

「……………」

「0点にこだわることとは、100点にこだわることと同じじゃないかな」

「……………」

ユウは、黙ったままだった。うつむいて、空っぽのラーメン丼を見据えていた。丼の底に描いてある龍の絵が、やけにはっきりと目に映る。静かなときが流れた。吾郎もコージもなにもいわず、ユウの顔を見守った。

(阿部夏丸『オグリの子』より)

※作問の都合上、文章の一部を改変しています。

問1 傍線部ア～エの漢字の読み方を、ひらがなで答えなさい。

問2 本文中の空らん I にあてはまる言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア よくほえる犬のような
- イ まな板の鯉こいのような
- ウ ぬれねずみのような
- エ 捨て猫ねこのような

問3 傍線部①「二人は黙ったままだった」とありますが、なぜ「黙ったままだった」のでしょうか。「コージ」と「ユウ」のそれぞれについて、本文の言葉を使って説明しなさい。

問4 傍線部②「特別なあたたかさ」が表すものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 涙となって流れ落ちた自分の悲しさやくやしさ
- イ 吾郎が腕を振るって作った他にはないおいしさ
- ウ 張りつめた気持ちをときほぐしたすばらしさ
- エ ユウを気づかってくれたコージと吾郎のやさしさ

問5 本文中の空らん II にあてはまる言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア がっかりした
- イ 安心した
- ウ うぬぼれた
- エ どきつとした

問6 傍線部③「ユウは少し考えていた」とありますが、ユウが「考えていた」ことを説明したものととして、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 吾郎になら本当の気持ちを話しても分かってくれるのではないかということ。
- イ 吾郎なら自分の代わりに先生や父親を説得してくれるのではないかということ。
- ウ コージなら頑張れば本当に100点をとることができるのではないかということ。
- エ コージならカンニングをして同じ罪をかぶってくれるのではないかということ。

問7 傍線部④「ん……ちがうな。だいぶちがう」とありますが、吾郎はユウのどのような点が「ちがう」と考えたのですか。本文内容をふまえて、100字以内で説明しなさい。

問8 吾郎の人物像を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無責任な発言やふざけた態度でユウやコージを困らせる人物
- イ 常に子供の視点に立ってユウやコージをかばい続ける人物
- ウ ユウやコージの気持ちを良く理解できる友達のような人物
- エ ユーモアを交えながらも本質を見ぬき的確に発言する人物

解答

- 問一 ① あまる ② うる ③ さす ④ つく ⑤ あげる
 問二 ① 変身 ↓ 返信 ② 暑く ↓ 熱く ③ 会場 ↓ 開場
 ④ しっかりトマトを ↓ しっかりと的を
 ⑤ 仕事に離れて ↓ 仕事には慣れて

- 問一 ア 技術 イ 典型 ウ 賛美 エ 不可欠
 問二 I 悪い影響 II ひとを傷つけること
 問三 III エ IV オ
 問四 謝罪だけでは気がすまなかった、ということ
 問五 どんなことが相手に不快感をあたえ、傷つけることになるか、すべてをあらかじめ知る
 ことはできないにもかかわらず、それを要求している発言であるから。
 問六 ア× イ× ウ○ エ○
 問七 A 相手が苦勞したり傷ついたりしないように
 B きびしさ C やさしさ D いま傷つけないように全力を尽くすこと
 E 傷つけないようにする

- 問一 ア せお（い） イ てさ（げ） ウ ま（じり） エ ちよつし
 問二 エ コージ：追いつめられた友だちにかける言葉などもち合わせていなかったから。
 問三 ユウ：言葉を交わしたら泣き出してしまいそうになる自分を感じていたから。
 問四 エ
 問五 イ
 問六 ア
 問七 ユウは0点を取ることでコージやナオトたちの仲間だということを示したつもりだったが、それは成績のよい悪いで人を判断していることになり、それぞれのちがいを認め合う本当の友情とはちがうという点。
 問八 エ

解説

問一 一つ前の文章で「どのようなことをしたら相手に不快感をあたえ、傷つけることになるか、すべてをあらかじめ知ることはできない。」ので「謝罪することに意味がある」にもかかわらず、謝罪が受けいれられないとはきびしい性格だと筆者が感じたこと述べられています。

問二 「100点が取れるユウと」点しか取れないコージが友達だから、すごいと思うんだ」「そのままではよかったんじゃないか」「0点にこだわるってことは、100点にこだわるってことと同じじゃないかな」という言葉に吾郎の考えが表れています。要約して答えましょう。